

古スラヴ語における、所謂行為名詞 -n/tie の機能について¹

§1 古スラヴ語の -nie 又は -tie に終る、所謂行為名詞についての言及は極めて少ないが、その機能については、「格変化を有する不定詞」に外ならないとするのが、概ね従来の定説であった²。

しかし乍ら古スラヴ語の比較的古層を映していると信ぜられている「ゾグラフ四福音書」Codex Zographensis についてみれば、凡そ 300 例にのぼるこの種の名詞のうち、ギリシア語原文の不定法に対応するものは、僅々 10 例を数えるに過ぎない。

またギリシア語の不定法がゾグラフ四福音書の何に対応しているかを調査した結果は、ギリシア語の不定法が、スラヴ語の不定詞、スピヌム、副文章による回説的表現、絶対与格等、状況との結びつきが比較的強い文脈に対応していること、従ってスラヴ語の不定詞と -n/tie に終る名詞の意義が、可成り異った性格のものであると考えねばならぬこと、であった³。

§2 このことから、少くともゾグラフ四福音書における限り、-nie, -tie に終る行為名詞と不定詞とは、その機能に関して相異なるものであると、結論される。

もしこの推論が正しいとするならば、次に問題とすべきは、両者の相違は奈辺に存しているか、ということであろう。現在の所この間に全面的に答えるべき材料は持合せていない。ここで考察しようとするのは、この問の一部、即ち -n/tie に終る名詞の機能は何であったか、という問題に限られる。

I. 行為の対象

§3 この種の名詞が「行為」をあらわすものでないことを、最も明白に示すものとして、これが「行為の対象」をあらわす場合がある。

たとえば $\chi\lambda\epsilon\beta\upsilon\ \pi\rho\epsilon\delta\upsilon\lambda\omicron\zeta\eta\eta\epsilon$, ἄρτος προθέσεως 「供えのパン」(Matth. 12:4, Marc. 2:26, Luc. 6:4); $\eta\mu\epsilon\eta\eta\epsilon$, ἃ ὑπάρχοντα 「財産」(Matth. 24:47, Luc. 8:3, 8:43, 11:21, 12:5, 12:33, 12:44 etc. etc.); $\omicron\delta\epsilon\eta\eta\epsilon$, τὸ ἐνδύμα 「着物」(Matth. 28:3, Luc. 9:29);

¹ 『京都産業大学国際言語科学研究所報』第4巻第2号 昭和58(1983)年3月30日 52-62頁。

² たとえば A. Vaillant, *Manuel du vieux slave*, t.1, Paris 1964, p. 348; F. Miklosich, *Vergleichende Grammatik der Slavischen Sprachen*, Bd. IV, Syntax, Heidelberg 1926, p. 877.

³ 拙論「スラヴ語の行為名詞 -nie, -tie について」『京都産業大学国際言語科学研究所報』3(2), 1982, pp. 50-59.

ΔΟΣΤΟΨΗΝΗ, κληρονομία 「遺産」 (Marc. 12:7, Luc. 12:13, 20:14); ΠΡΗΣΤΑΒΛΕΝΗ, ἐπιβλημα 「補布」 (Luc. 5:36 bis, Marc. 2:21); ΒΗΔΨΗΝΗ, εἶδος 「姿」 (Luc. 9:29, Iohan. 5:37); ΚΒΛΕΝΗ, ὄπτασία 「姿」 (Luc. 24:23); ΔΔΔΗΝΗ, δόματα 「賜物」 (Luc. 11:13); ΟΣΝΟΒΔΗΝΗ, θεμέλιον 「土台」 (Luc. 6:48, 6:49, 14:29); ΠΛΗΝΟΒΕΝΗ, πτύσμα 「唾」 (Iohan. 9:6) などである。

II. 行為の結果

§4 行為の対象と密接に関連しているものに、行為の結果を表わすものがある。これもまた「行為」をあらわすものではない。これは結果の意義を有する対格補語と対応するものである。たとえば писать письмо 「手紙を書く」、шить платье 「着物を縫う」における письмо, платье がこれであって、この種の対格補語の特徴は、これによって示される対象が、行為以前に存在していない、という点にある。-ние, -тие に終る名詞の場合も同様であって、たとえば НАПΨΔΗΝΗ 「銘」は、НАПΨΔТИ 「(上に)書く」という行為に先立って存在するものではない。

これに属するものとしては、例えば、НАПΨΔΗΝΗ, ἐπιγραφή 「銘」 (Luc. 2:2, 20:24 etc.); ΡΟЖΔΕΝΗ, συγγενής 「親族」 (Marc. 6:4, Luc. 1:58, 1:61, 2:44); ΖΨΔΔΗΝΗ, οἰκοδομή 「建物」 (Marc. 13:1, 13:3, 14:12); ΖΝΔΗΝΗ, γνωστός 「知人」 (Luc. 2:44); ΡΡΟΚΔΖΕΝΗ, λέπρα 「癩」 (Luc. 5:12); ΣΨΜΨΨΕΝΗ, μίγμα 「混ぜたもの」 (Iohan. 19:39); ΒΨΖΔΔΔΗΝΗ, ἀνταπόδομα 「返報」 (Luc. 14:12); ΜΨΨΤΕΝΗ, ἐχδιχήσις 「復仇」 (Luc. 21:22); ΟΒΨΔΔΗΝΗ, κραπάλη 「酔い」 (Luc. 21:34); ΗΣΠΛΨΝΕΝΗ, πλήρωμα 「満ち満ちている一切のもの」 (Iohan. 1:16); ЖИТОМΨΡΕΝΗ, σιτομήτριον 「割当てられた糧食」 (Luc. 12:42); ΟΣЖΔΕΝΗ, χρέμα 「罪」 (Luc. 20:47, 23:39, 24:20, Marc. 12:40); СТАЖΔΗΝΗ, κτήμα 「財産」 (Marc. 10:22), ΡΔΖΨΨΒΛΕΝΗ, διαμερισμόν 「分裂、不和」 (Luc. 12:51); ΒΨΖΜΨΨΤΕΝΗ, σάλος 「荒波」 (Luc. 12:25, Iohan. 5:3 「異本」); ΣΨΝΑΤΗ, συνέδριον 「議会」 (Marc. 13:9) etc.

§5 このような観点からすれば、先に「行為の対象」をあらわすとしたものも、実はこの類に属せしめられるべきものであることに気付く。

例えば ΡΡΨΔΨΛΟΖΕΝΗ 「供物」は、ΡΡΨΔΨΛΟΖΗΤΗ 「前に置く、捧げる」という行為の結果、始めて生じる概念である。明らかなように、「捧げる」という行為なしに、あるいはこのような行為を前提としないでは、「供物」とされる対象はこの名で呼ばれることはなく、それぞれの名辞で以って呼ばれるに過ぎぬであろう。「行為の対象」を表わすものも、「行為の結果」をあらわすものも、行為によって初めて言語的に命名されるという点では、相等しいのである。

III. 行為の内容

§6 行為の結果と意義的にきわめて近く、これと密接に関連しているものに、「行為の内容」とでもいうべきものがある。例えば、

1) **ΩΝΨ ΖΕ ΒΨΣΤΑΒΨ ΖΑΠΡΨΤΗ ΒΨΤΡΨ· Ι ΒΛΨΝΕΝΗΨ ΜΟΡΨΣΚΟΨΜΟΨ· Ι ΟΨΛΕ- ΖΕ Ι ΒΨΣΤΨ ΤΗΨΗΝΑ·** (p.97, 160r22)

ὁ δὲ διεγερθεὶς ἐπετίμησεν τῷ ἀνεμῷ καὶ τῷ χλύδωνι τοῦ ὕδατος, καὶ ἐπαύσαντο, καὶ ἐγένετο γαλήνη. (Luc. 8:24)

「彼(イエス)は起き上がって風と荒波とおしかりになると、止んでなぎになった。」

この場合 **ΒΛΑΝΕΝΗ** は、現代語の「波立ち」とは異り、**волна** 「波」を意味している。しかしこれを単純に **ΒΛΨΝΗΤΗ** 「波立つ」という行為の結果であるとすることはできない。

「波」の存在と「波立つ」という行為とは、いわば表裏一体をなしているのであるから、これはむしろ「波立つ」という行為の全過程を、その内容としていると言うべきであろう。**ΟΨΥΕΝΗ** 教え「教え」、**ΖΗΔΑΜΕΝΗ** σημειον 「しるし」なども、いくらか抽象的であるがこれと同じであると考えられる。

§7 この種の意義は、文献についてみれば頻度が最も大きく、**-н/т-ие** に終る名詞の意義の中心的なものであると推察される。

たとえば、

ΟΨΥΕΝΗ, διδαχή 「教え」 (Matth. 7:28, 15:9, 16:12, etc.); **ΖΗΔΑΜΕΝΗ**, σημειον 「しるし」 (Matth. 12:38, 12:39, 16:1 etc.); **ΠΟΜΨΙΛΕΝΗ**, ένθυμήσις, διαλογισμός, διανοία 「考え、思い」 (Matth. 9:4, Luc. 2:35, 5:22, 6:8 etc.); **ΒΛΗΣΨΑΝΗ**, άστραπή 「閃光、稲妻」 (Luc. 11:36); **ΠΡΨΔΑΔΑΝΗ**, παράδοσις 「いい伝え」 (Matth. 15:2, 15:3, 15:6, Marc. 6:4 etc.); **ΠΨΝΗ**, συμφωνία 「音楽」 (Luc. 15:25); **ΣΤΡΑΨΟΒΑΝΗ**, φόβητρον 「恐しい光景」 (Luc. 21:11); **ΟΒΨΤΒΑΝΗ**, έπαγγελία 「約束、約束されたもの」 (Luc. 24:47); **ΣΒΨΤΨΝΗ**, φώς 「光」 (Iohan. 5:36); **ΠΟΒΕΛΨΝΗ**, δόγμα 「勅令」 (Luc. 2:1); **ΒΟΛΑ**, θέλημα 「意志」 (Luc. 12:47); **ΒΛΑΓΟΒΟΛΕΝΗ**, εὐδοχία 「善意」 (Luc. 1:25); **ΨΨΨΤΕΝΗ**, άρπαγή 「強欲」 (Luc. 7:39); **ΠΟΝΟΨΕΝΗ**, δνειδος 「非難」 (Luc. 1:25); **ΥΔΑΝΗ**, προσδοχία 「期待」 (Luc. 21:26); **ΣΤΡΟΨΝΗ ΔΟΜΟΨ**, οίκονομία 「執事職」 (Luc. 16:3); **ΡΑΖΟΨΜΨΝΗ**, γνώσις 「知識」 (Luc. 11:52) etc.⁴

IV. 結果としての状態

§8 以上の外、「行為の結果としての状態」をあらわすと考えられる例が存在するが、これは「行為の結果」の一変種と見做すことができる。たとえば、

⁴この外 **ΔΑΖΔΒ ΔΨΛΑΝΗ**, δος έργασίαν 「努力せよ」 (Luc. 12:57) における **ΔΨΛΑΝΗ** 「仕事」もこれに属すると思われる。これがラテン語の *operam dare* の直訳であって、対象としての「仕事」を指すものではないと思われるからである。

- 2) Ў СН ѠТЬ ЛНШЕННѢ СВОЕГО· ВСЕ ЁЛНКО ІМѢЎШЕ ВЪЗВРѢЖЕ· (p. 70, 115v17)
 αὐτὴ δὲ ἐκ τῆς ὑστερήσεως αὐτῆς πάντα ὅσα εἶχεν ἔβαλεν. (Marc. 12:44)
 「その婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物を...入れた。」
- 3) ВЪЗВРѢВЪ НА НѦА СЪ ГНѢВОМЪ· СКРѢВА Ѡ ѠКАМЕЊЕННИ СРѢДЪЦА ІХЪ·
 (p.51, 83r9)
 καὶ περιβλεψάμενος αὐτοὺς μετ' ὀργῆς, συλλυπούμενος ἐπὶ τῇ πωρώσει τῆς καρδί-
 ας αὐτῶν. (Marc. 3:5)
 「(イエスは)怒りを含んで彼らを見まわし、その心のかたくなさを嘆いた。」
- 4) ДА РАЗΟΥМѢШИ Ѡ ННХЪЖЕ НАΟΥННЪ СѦ ЁСН СЛОВЕСЕХЪ ОУТВРѢЖ-
ДЕНЬЕ· (p.80, 131r13)
 ἵνα ἐπιγνῶς περὶ ὧν κατηχήθης λόγων τὴν ἀσφάλειαν. (Luc. 1:4)
 「汝の報告を受けたことが、言葉の確実なものであることを、汝が知るように。」

V. 状 態

§9 たとえば СЪМѢРЕННЕ, ταπεινώσις 「卑賤の状態」 (Luc. 1:48); ΠΡΗΛΕΖΑΝΝΕ, ἐχτενέστερον 「熱心(に)」 (Luc. 22:44) のように、状態動詞を派生原基とするものは、その動詞のあらわす「状態」を示す。

これらは状態をあらわすという点では、「結果としての状態」に近縁であるとも考えられようが、派生原基たる動詞の意義からすれば、寧ろ「行為の内容」の一変種と考えるべきであろう。

VI. 行 為

§10 以上述べた各種の用例は、この種の名詞の用例の、少くとも半ば以上を占めている。これを除いた残りは、従来「行為そのもの」をあらわすと考えられていたものが大部分であって、この種の名詞が「行為名詞」であり、「変化する不定詞」であると感じさせる根拠となっているものである。

したがって検討すべきは、これが果して「行為そのもの」を表わすものであるか否か、ということである。

§11 まずこの種の名詞が「同族補語」として用いられる場合がある。たとえば、

- 5) МОЖЕТА ЛН ПНТН УДШЖ, ЪЖЕ ѠЗЪ ПНЪ· ЛН КРЪШТЕННЕМЪ ІМЪЖЕ ѠЗЪ
КРЪСТАЖ СѦ· КРЪСТНТН СѦ· (p.66, 108r2)

δύνασθε πιεῖν τὸ ποτήριον ὃ ἐγὼ πίνω, ἢ τὸ βάπτισμα ὃ ἐγὼ βαπτίζομαι βαπτιστῆναι; (Marc. 10:38)

「あなたがたは私が飲む杯を飲み、私が受けるバプティスマを受けることができるか。」

このような同族補語は、行為をあらわす動詞が別に提示されているのであるから、それ自身行為をあらわすというよりは、むしろ「行為の内容」をあらわすと解すべきであろう。ЖЕΛΈΝΕΜЬ ВЪЖДЕΛΈХЪ, ἐπιθυμία ἐπιθύμησα 「切に望んでいた」(Luc. 22:15)も、古スラヴ語訳では厳密な意味での同族補語ではないが、やはりこれに属すると考えられる。

§12 この外 КРЪШТЕННЕ は ΠΡΟΠΟΝΕΙΝ ΒΑΠΤΙΣΜΑ 「洗礼を宣べ伝える」(Luc. 3:3, Marc. 1:4) という形でも用いられている。これも明らかに洗礼という行為そのものではなく、洗礼の意味乃至は内容を指しているとみられる。

次の例における КРЪШТЕНЬЕ にも、単独で用いられているが、同じことが言える。

6) Ι ΡΥΨΤΕ ΜΗ· ΚΡЪШТЕНЬЕ ΙΩΑΝΝΟΒΟ СЪ НСЕ ΛΗ ΒΈ· ΙΛΗ ΟΤЪ ΥΚЪ
(p.124, 205r9)

καὶ εἶπατέ μοι· Τὸ βάπτισμα Ἰωάννου ἐξ οὐρανοῦ ἦν ἢ ἐξ ἀνθρώπων;(Luc. 20:4)

「私に言ってほしい。ヨハネのバプティスマは天からであったか、人からであったか。」

次の例における ЦЕЛОВАННЕ, ἀσπασμός 「あいさつ」あるいは СПАСЕНИЕ, σωτηρία 「救い」もまた、行為そのものというより、行為の内容をあらわしていると解される。

7) ΩΝΑ ΖΕ СЛЫШАВЪШН СЪМАТЕ СΛ Ο СЛОВЕСН ЁГО· Ι ΠΟΜΥШΛ΄ΒΑШЕ ВЪ СЕВΈ· ΚΑΚΟ СЕ ΒЖДЕΤЪ ЦЕЛОВАНЬЕ· (p.81, 133r15)

ἡ δὲ ἐπὶ τῷ λόγῳ διεταράχθη καὶ διελογίζετο ποταπὸς εἶη ὁ ἀσπασμός αὐτος. (Luc. 1:29)

「この言葉に(マリアは)胸騒ぎがして、このあいさつは何のことであろうかと思いめぐらしていた。」

8) ДАТН РАЗΟΥМЪ СПЕНЬЕ ЛЮДЕМЪ ЕГО (p.83, 136r14)

τοῦ δοῦναι γνῶσιν σωτηρίας τῷ λαῷ αὐτοῦ. (Luc. 1:77)

「救いについての知識をその民に与えるために。」

§13 一方行為自体の意義が強いと感じられるものの中には、ВЪ 又は НА を伴って目的を表わすものが多い。たとえば ВЪ СЪВΈДΈННЕ, εἰς μαρτύριον 「証しのために」のような場合である。

更に行為自体を表わすと感じられるものには、同時関係を含む時間的前後関係をあらわすものが多い。

このうち同時関係をあらわすものは「ВЪ + 対格又は前置格」の構文をもち、ギリシア語原典の「ἐν + 与格」に対応しているものが多い。例えば ВЪ СЪΚΟΝΒΥΔΗΝΗΕ, ἐν τῇ συντελείᾳ 「終りの時に」(Matth. 13:40, 13:49)、ВЪ ΒΪΣΚΡΪΨΗΝΗΕ, ἐν τῇ ἀναστάσει 「復活の時に」(Marc. 12:13; Luc. 14:14 etc.) などがこれである。この外ギリシア語の属格に対応する例として、ВЪ ΚΟΥΡΟΓΛΑΨΗΝΗΕ, ἀλεκτροφωνίας 「鶏の鳴く時に」(Marc. 13:35) がある。

更に時間的前後関係をあらわすものとしては、たとえば ОΤΨ СЛОЖЕНΗΕ, ἀπὸ καταβολῆς 「創成の時から」(Matth. 13:39, 25:34, Luc. 11:49)、ΠΡΪΨΔΕ СЛОЖЕНΗΪ ΒΪΣΕΓΟ ΜΗΡΔ, πρὸ καταβολῆς κόσμου 「宇宙の創成の前に」(Iohan. 17:24) などがある。

§14 これらの用例をみれば、この種の名詞が行為そのものを表わしているという印象を受ける。しかし使用されている語彙からすれば、これらが殆んどの場合「証し」、「許し」、「復活」、「啓示」、「悔い改め」、「創世」、「世の終り」、「迫害」のように、すぐれてキリスト教的な観念をあらわすものであることは、注目すべきことに思われる。このことは、この種の名詞が行為というよりは、むしろ行為の内容乃至行為の意味を指す可能性を、強く示唆しているからである。

事実ここにあらわれる同じ語であって、行為自体というよりも、文脈からして行為の内容を指すと解されるものも、存在しているのである。たとえば、

9) Ἄ ΖΑΤΒΑ ΕΣΤΪ ΚΟΝΒΥΔΗΝΗΕ ΒΪΚΟΥ (p. 19, 32v11)

ὁ δὲ θερισμὸς συντέλεια αἰῶνός ἐστιν. (Matth. 13:39)

「収穫は世の終りである。」

10) Ἄ ΖΪ ΕΣΜΪ ΒΪΣΚΡΪΨΗΝΗΕ Ι ΖΗΒΟΤΪ (p. 158, 261v15)

Ἐγὼ εἶμι ἡ ἀνάστασις καὶ ἡ ζωή. (Iohan. 11:25)

「私こそは復活であり、生命である。」

その他の、従来行為自体を表わすと考えられていたものにも、キリスト教の教義と結びついた意義を持つものが少なくない。たとえば、ΓΟΝΗΝΗΕ, διωγμὸς 「迫害」(Matth. 13:21; Marc. 4:17); ΠΡΪΛΙΒΟΔΪΔΗΝΗΕ, μοιχεῖα 「姦淫」(Matth. 15:19; Marc. 7:22); ΛΙΒΟΔΪΔΗΝΗΕ, πορνεία 「姦通」(Marc. 7:22; Iohan. 8:41); ΧΪΔΛΗΝΗΕ, βλασφημία 「渎神」(Marc. 7:22); СТОУΔΟДΪΔΗΝΗΕ, ἀσέλγεια 「好色」(Marc. 7:22); ОΒΡΪΖΔΗΝΗΕ, περιτομή 「割礼」(Iohan. 7:22; 7:23); ΛΟΒΖΔΗΝΗΕ, φιλημα 「口づけ」(Luc. 7:45; 7:22) etc.

以上の考察から、この場合にもこの種の名詞が行為自体をあらわすと感じられるのは、

専ら文脈によるのであって、本来はもっと内容にかかわるものであったという疑いが、一層濃厚になる。

§15 「ВЪ + 前置格」の構文にあらわれるものは、例えば ВЪ ΤΟΥΕΝΗΙ ΚΡΪΒΕ, ἐν ῥύσει αἵματος 「血の流れにある、即ち長血を患っている」(Marc. 5:25; Luc. 8:43); ВЪ ΤΡΥΠΪΝΗΙ, ἐν (τῇ) ὑπομονῇ 「忍耐して」(Luc. 8:15, 21:19); ВЪ ΠΡΪΛΥΒΟΔΪΔΗΝΗ(Ι), ἐπὶ μοιχείᾳ, 「姦淫の最中に」(Iohan. 8:3, 8:4) のようなものである。

これらは行為をあらわすとも考えられるが、上述したことを考え合せば、行為の内容を指すと解釈する余地もあると思われる。

VII. 行為の場所

§16 以上の外、極めて少数ではあるが、行為の場所をあらわすと考えられるものがある。例えば СΪΔΗΝΗ, σπόριμος 「畑」(Matth. 12:1; Marc. 2:33; Luc. 6:1 etc.) および ΝΗΖΥΧΟЖΔΕΝΗ, κατὰβασις 「下り坂」(Luc. 19:37) である。

これらは何れもギリシア語の σπείρω > σπόριμος, καταβαίνω > κατὰβασις の、いわゆる calque であるとも考えられるが、その場合にも、これが -n/t-ie に終る名詞によって訳出され得たということに、注目しない訳にはいかない。もしこの種の構成をもつ名詞が、専ら行為そのものを示すものであったとすれば、このようなことは、生じ得ないと考えられるからである。

このような意義は、先に述べた「行為の結果」の一変種であると考えられる。たとえば「種を播いた」結果として、「畑」なるものが生成するとみられるからである。

VIII. 結 論

§17 以上の結果をまとめれば、次のようになる。

I	(1) 行為の対象 -	(2) 行為の結果 -	$\left\{ \begin{array}{l} (4) \text{ 結果としての状態} \\ (7) \text{ 行為の場所} \end{array} \right.$
II	(3) 行為の内容 -	$\left\{ \begin{array}{l} (5) \text{ 状態} \\ (6) \text{ 行為そのもの(イ)} \end{array} \right.$	
III	(6) 行為そのもの(ロ)		

すなわち「行為の対象」(1)と「行為の結果」(2)とは、行為によってはじめて言語的命名を得る、という点では近縁であった。また「結果としての状態」(4)及び「行為の場所」(7)は共に「行為の結果」(2)の変種であると考えられた。

一方「状態」(5)と行為そのもの(6)のうち、「行為の内容」とも解されるもの(イ)は、「行為の内容」の変種である。

「行為そのもの」でかつ行為以外の解釈を許さないもの(6)(ロ)は、比較的少数であるが、この意義は他のどの意義とも、派生関係にない。

さて上掲の I の系列と II の系列とを比較すれば、その相違はかなりの程度に派生原基たる動詞の語彙的意義に依存していると思われる。とりわけ II の系列は、行為のプロセスを問題とすることが多いから、いわば不完了体的なアスペクトをもっているといえる。

§18 このことは、I と II の系列が、その命名の原理そのものにおいては、必しも異ったものではないことを、予測せしめる。

そのような原理が何であるかについては、仮説の域を出ることはできないが、筆者はこれを「行為によって生じた状況の変化の総和」とあると考えたい。

たとえば「書く」という行為における変化の総和は、「書かれたもの」として現象するであろう。「播く」という行為の総和は、その結果としての「畑」となるに違いない。ОУЧЕННЕ「教え」もまた、何を以て「教える」とするかを含めて、ОУЧИТИ「教える」という行為の「状況の変化」の総体として、観念せられるであろう。即ち「行為の内容」である。

しかし乍ら -n/tie に終る名詞の原義についてのこのような規定からは、「行為そのもの」をあらわすという意義は説明できない。この意義は、他の種々の意義と直接的な派生関係にないところから、新たに獲得された意義であるとみるのが、妥当であろう。とすればこれは恐らく、行為そのものを表わすとも解釈できる文脈を媒介にして、漸次発達したものとみるべきであろう。

もしこのような推論が正しいとすれば、この種の意義をとるものがゾグラフ四福音書においては未だ少数であることから、ゾグラフ四福音書の言語は、この意義の発達に関して未だ比較的初期の段階にあった、ということになる。仮説として提示しておきたい。